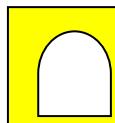


日吉台地下壕保存の会会報



第130号
日吉台地下壕保存の会

2017年度総会のお知らせ

昨年4月14日、熊本で大震災がおき、一本の石柱のような石垣で支えられた熊本城が、何度もテレビに映し出されました。崩れた街並みと避難所で身を寄せ合う人々の姿が、5年前におきた東日本大震災と重なりました。6月頃には、戦争遺跡全国ネットワークを通じて、熊本市の戦争遺跡にも被害が出ていること、被害調査の費用のこと、全県下の戦跡について調査中であること、などの報告がありました。その時初めて、私たちは震災の被害は全てに及ぶ、という当たり前のことと思い知らされたのです。そして、戦跡保存に関わる多くの人は、後悔の念をもって東日本各地で調査もされずに、存在すら知られずに消失してしまった多くの戦跡に想いを巡らせたのです。失ってからでは遅すぎます。

戦争の時代を伝える貴重な「語り部」としての日吉台地下壕が、その役割を十分に果たすためには、さらに調査研究や聞き取りを重ね、他団体と交流し、活動の充実を図る所存です。幸にも志を同じくする心強い仲間は、増えていますし、会員の皆さまが、支えてくださるからこそ、間違えずに少しずつ進んでくることが出来ました。

今年も、2017年度の総会を次の要領で開催します。記念講演は、神田外語大学講師で当会の運営委員でもある遠藤美幸さんです。今日さらに困難となつた「戦場体験」を引き継ぐことを、ライフワークとしています。会員の皆さまには新緑の日吉キャンパスにお越しくださいますよう、お知らせいたします。

日時 2017年6月10日(土) 13:00~16:00

会場 慶應義塾日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

記念講演 13:00~14:45

演題 『戦場体験』を引き継ぐということ

講師 遠藤美幸さん(神田外語大学講師・当会運営委員)

総会 15:00~16:00

- ・2016年度活動報告
- ・2016年度会計報告
- ・2016年度会計監査報告
- ・2017年度役員選出と承認
- ・2017年度活動方針の提案と承認
- ・2017年度予算の提案と承認

目次

巻頭言：2017年度総会のお知らせ	P1
お知らせ：2017平和のための戦争展inよこはま	
第21回戦争遺跡全国シポジウム高知大会	P2
報告：第11期ガイド養成講座「戦争体験を聞く」	P3-6
★川崎市中原区元住吉付近の空襲 中野幹夫さん	
★私の空襲体験 鈴木信二さん	
連載：海外の戦跡めぐり(6)トロトロ・パールハーバー(下)	P7
報告：慶應義塾の運動部部屋は日吉台小学校の仮教室になる	
	P8
連載：日吉第一校舎ノート(12)アール・デコの意匠(2)	P9-10
聞き取り：元通信兵保坂初雄さんの日吉勤務体験談	P10-13
報告：2016年度地域のため応援事業最終報告会	P14
お知らせ：雑誌「横濱」の日吉空襲の記事について	P15
活動の記録(2~4月)：	P15-16

お知らせ

2017 平和のための戦争展 in よこはま 5月 29日・横浜大空襲から72年

6月 2日（金）～6月 4日（日） 横浜駅西口かながわ県民センター
展示（1階 展示場）10時～19時（4日は18時まで）

横浜大空襲他 約500点（日吉台地下壕保存の会も展示参加）
3日・4日は11時から空襲体験者・被爆者のお話があります。

特別企画（2階ホール）13時開場 13時30分～16時

6月 3日（土）講演「希望の灯を消さないために」小山内美江子さん（実行委員長・脚本家）

報告「被爆3世を生きる」林田光弘さん（明治学院大学大学院生）

朗読劇「横浜は戦場だった」横浜市立日吉台中学校演劇部

朗読とトーク 横浜米軍機墜落から40年「ハトポッポを歌いながら」

高橋長英さん（俳優）

6月 4日（日）報告「高校生が戦争の影を見て、学んで、伝える」グローカリー（Y校生）

講演「新聞と戦争」斎藤大起さん（神奈川新聞文化部記者）

「横浜の光と影」山崎洋子さん（作家）

第21回戦争遺跡全国シンポジウム高知大会 —今こそ戦争遺跡を平和のために—

日時 2017年8月19日（土）13:00～全体集会・講演会・全国交流会
20日（日）9:00～分科会・閉会集会

21日（月）午前中 遺跡見学会（A掩体壕ほか・B44連隊弾薬庫ほか）

会場 高知県立県民文化ホール（高知市本町4-3-30）

☆スケジュールと申し込み方法は次号でお知らせします。

宿泊は早めに予約してください。

報告**第11期ガイド養成講座（第二回）“戦争体験を聞く”**

3月4日（土）のガイド養成講座2日目は、「戦争体験を聞く」というテーマで6名の方からお話しして頂きました。今回は、直接の空襲体験談として、川崎中原の空襲・戦災を記録する会の中野幹夫さんと、保存の会の鈴木信二さんからのお話しです。次号からも順次ご紹介してゆきます。

川崎市中原区元住吉付近の空襲**川崎中原の空襲・戦災を記録する会 中野幹夫さんのお話**

(文責 山田譲)

【日吉台地下壕保存の会では、日吉の海軍地下壕周辺の空襲調査を2008年に行いましたが、日吉の北側、矢上川の対岸である元住吉や川崎市中原区の空襲被害については、私たちはわかりませんでした。その後、2009年から中原区の有志の皆さんによる精力的な調査がおこなわれ、軍需工業地域であった中原区の空襲被害の全貌が明らかになりました。今回のガイド養成講座では、元住吉駅の西側、木月祇園町にお住いの中野幹夫さんに、その体験談をお話しいただきましたので、その要旨を再録いたします。中野さんは敗戦時9才でした。当時の体験を記憶をもとにたくさんの絵に描いていらして、その絵を紙芝居のように見せながらのリアルなお話でした。】

私の家のまわりはもともと農村地域で、田んぼと桃の木の畠が広がるのどかなところでした。近くには小学校が3つありましたが、関東大震災で全部つぶれてしまいました。その後に私の家の近くに、住吉尋常小学校ができました。水車小屋がその近くにありました。カエルとホタルがいっぱいでした。興亜学院という少年感化院も近くにできました。元住吉の駅は一度火事で燃えてしましましたが、その後コンクリートに建て替えられました。しかし、その駅舎も戦時中は空襲除けで黒塗りでした。

この元住吉駅は、慶應と法政の予科の学生や軍需工場の勤め人で乗客が増えました。東京航空計器の工場ができて付属の青年学校もできました。東横線には、かつこいい電車があらわれて、流線形のガソリンカーの急行で8台走っていました。

そういう中で、昭和16年12月8日、小机に食料の買い出しに行ったら、小机駅では電灯に

暗幕を付けていて、何も知らない私は駅員に「大東亜戦争が始まったから早く帰れ」と怒られました。そして翌年4月18日、米軍の本土初空襲がありました。B25爆撃機16機が空母ホーネットから発進し、川崎にも2機、来襲しました。空襲警報なしで、川崎では34人が死に、90人が負傷しました。しかし新聞では「9機撃墜」と書かれていました。それでみんなは、これを「空気撃墜だ」と陰口していました。川崎市役所の時計塔で防空監視にあたっていた丸山さんは、爆撃機が飛んでくるのを



空襲体験を語られる中野幹夫さん

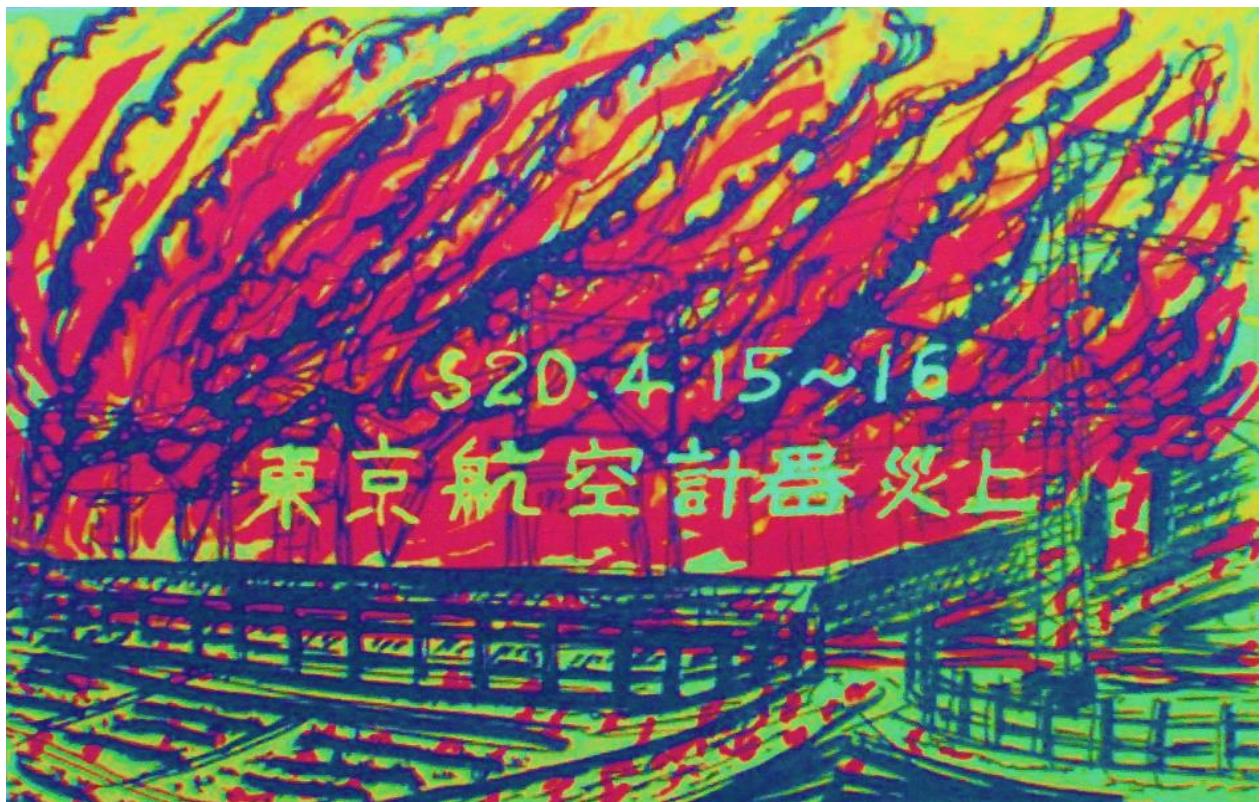
見つけ県庁に報告し、知事から表彰されました。

1944年6月16日に中国の成都から発進したB29爆撃機の初空襲が北九州がありました。このあと学童疎開が始まりました。住吉小学校ではグランドに用水池を掘って空襲にそなえました。小学校は当時、食料倉庫になっていました。11月1日にはサイパンからのB29偵察機が初飛来し、私はこの飛行機雲を高空に見たのを憶えています。1945年3月10日の東京大空襲も、東の空がたちまち赤く染まっていくのがよく見えました。それで自分の家でも防空壕づくりを始めました。地面を掘ると私の所は水が出るので、深く掘れないマンジュー型につくりました。駅のそばの家は建物疎開と言って、空襲による延焼防止のために取り壊されたので、その材木を使ってつくりました。

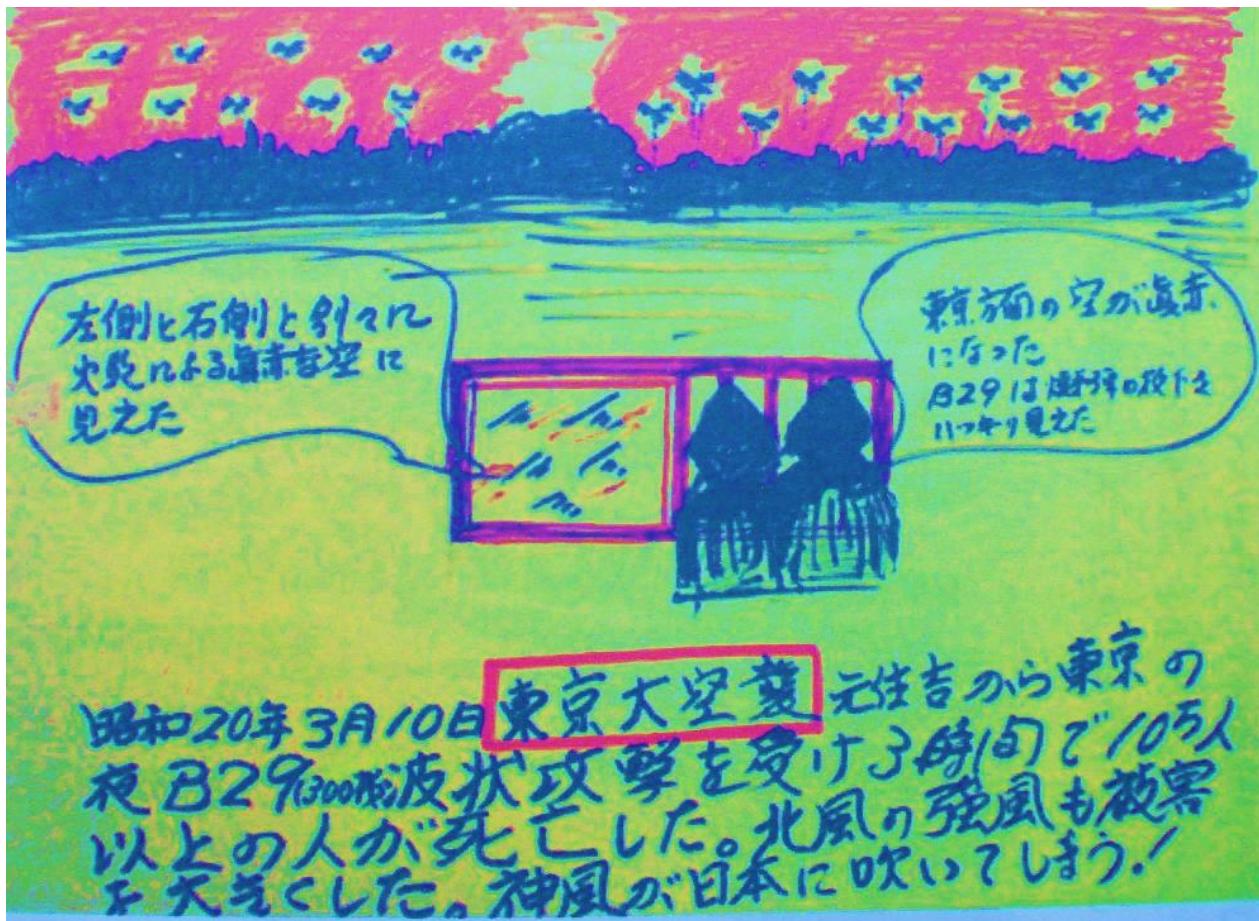
4月15～16日には川崎大空襲があり、自分はとても怖くてすっかり神頼みでした。兄が「外に出ろ」と言うので外に出てみると、照明弾で真昼のように明るくて、東横線の反対側の東京航空計器の工場は黒煙と紅蓮の炎で大火災でした。私は震えが止まりませんでした。はじめは黒い煙でしたが、その後白い煙になって2日間燃え続けました。コンクリートの建物の外側だけ焼け残りましたが、中は丸焼けでした。（戦後、米軍はこの建物を印刷所として使いました。）田んぼにも焼夷弾はいっぱい突き刺さっていました。みんな多摩川の河川敷に逃げましたが、焼夷弾が川に落ちて、ジュッという大きな音がするのが今も耳について残っています。

その後丹沢の大山に学童疎開で行きましたが、そこでも戦闘機が突然飛んできて、生徒がひとり爆撃で爆死しました。食料不足で、ご飯が食べられない苦しさはたいへんなものでした。ノミやシラミも大量発生し、医者もいない無医村でした。戦争では最後の1年に国内で一般市民60万人が死んでいます。早く戦争をやめていれば、死なずにすんだのです。

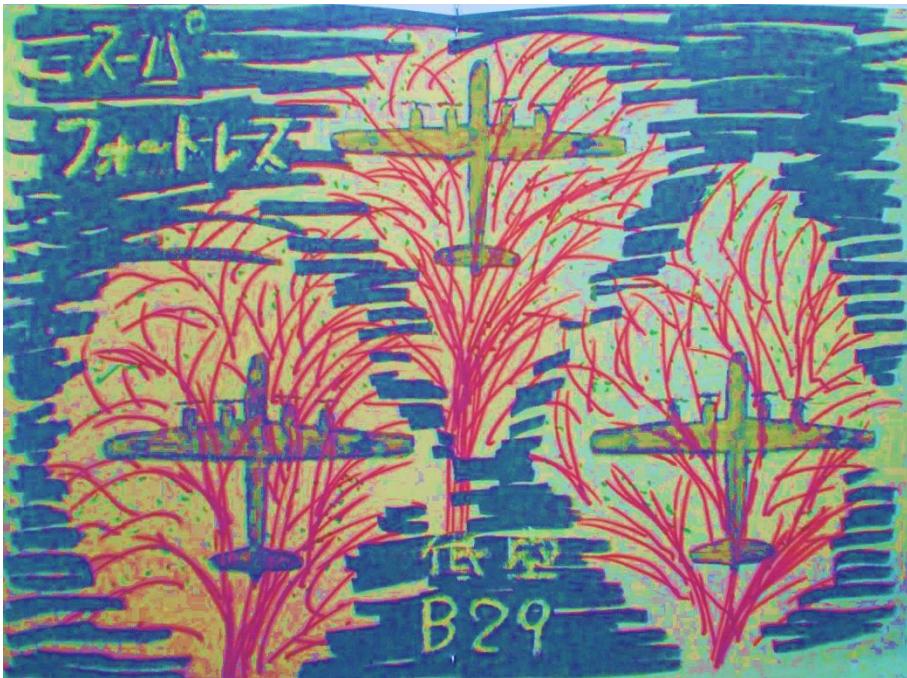
今は元住吉駅前もブレーメン通りになってしまった。昔から残っているお店は、青柳菓子店と尾原肉店だけになりました。しかし戦争や空襲の記憶を絶やしてはなりません。



“中原今昔かみしばい” より



“中原今昔かみしばい” より



“中原今昔かみしばい” より



ガイドの鈴木信二さん

私の空襲体験

日吉台地下壕保存の会 鈴木信二

○第一幕

1942年（昭和17年）4月18日 東京市内大森区在住 小学3年生。 大戦戦中初の空襲の知らせに待避のことなど考えもせぬ即座に屋根に上り眺望、敵機は編隊なく一機のみの飛行を目撃した。呑氣で無謀な行動だったが当時は戦勝気分で危険の意識はなかった。その後住居の縁側床下に深さ2メートル壱坪程度の防空壕を掘ったが、今思えば焼夷弾攻撃には全く役立たぬ無意味なもの。

○第二幕

1945年（昭和20年）7月12日 縁故疎開により福井県敦賀市に移住 小学6年生。夕暮れ時空襲警報発令合図も鳴るや鳴らぬ裡に強大な破裂音とともに30メートルほど離れた裏側の家屋に大きな紅蓮の火の手が上がった。母親は隣組の防火活動に出動（ただし火たたき棒とバケツリレーでの対応では全くはかない抵抗）。2歳上の姉と私は町周辺の畠地に避難した。焼夷弾から出た着火した油片が降り落ちてくる中集まっていた避難者はほとんどが若年者や学童で大人は目につかない。燃え上がる町を茫然と眺めながらその夜を明かした。翌朝焼け跡で母親と幸いにも邂逅できた。

サイパン陥落後に日課となったB29大編隊による日本空爆は大都市圏は繰り返し執拗に攻撃された一方で中小都市部では防空対抗能力に欠けるまま密集木造住宅地に対し焼夷弾がばら撒かれ毎日幾つかの市街地が一举に燃え上がり亡失していった。

○第三幕

1945年（昭和20年）7月19日 薄暮時福井県福井市が焼夷弾攻撃を受けた。当日は同市南方15キロほど離れた地点から被災を望見。地平線一杯に且つまた空高く真っ赤に燃え上がっておりまさに劫火、その下では多くの人々が逃げまどっていたのだ。地獄絵図そのもの、1500人を超す死者がでた。これから後も降伏宣言日までに広島、長崎他いくつかの都市が灰燼に帰しており、国内は無抵抗のまま戦闘なき無慈悲な戦場になっていたのです。被災223万戸、970万人、うち死者30万人。

連載

海外の戦跡めぐり(6) トラトラトラ、パール・ハーバー(下)

運営委員 佐藤宗達

「戦艦ミズーリ記念館」には橋を渡りフォード島に行きます。戦艦ミズーリは1941年1月に起工、5-6年かかるのを3年で造り1944年6月就役、命名者は当時ミズーリ州選出の上院議員トルーマンの娘です。それで降伏文書調印式に使われたようです。乗船して甲板を廻ります。幅は33メートル、これはパナマ運河を航行できる最大幅です。そのため主砲は16インチです。大和・武藏は幅の制限を受けてないので主砲は18インチというものが納得できます。1945年4月11日、神風特攻機が右舷艦尾付近に突入・激突しました。操縦士の遺体は甲板に投げ出されたが艦長は勇敢な兵士を讃えようと翌日水葬しています。その時の写真が展示されていますし激突跡は修理されずに痕跡を見ることが出来ます。右舷デッキには降伏文書調印式会場であったことを記した円形プレートが埋め込まれています。また調印式にはペリー艦隊が掲げた星条旗が使用されそのレプリカが展示されています。そして降伏文書のコピーも置いてあります。日本用は布カバー、連合国用は皮カバーです。カナダ代表は日本用文書の署名欄を1行間違えて下の欄に署名してしまいました。ガイドさん曰く、酔っていたようです。続く方々も1行ずらして署名、やむなく米国代表が訂正・署名というものです。副砲は10基ありましたが改造時に4基取り払いミサイル発射機が設置され、なんと湾岸戦争に出撃しているのです。

「太平洋航空博物館」は同じフォード島内にあります。戦中、戦後の航空機が展示されており、零戦も展示されていますが機体



戦艦ミズーリ記念館



太平洋航空博物館に展示されている"B25"



戦艦ミズーリに特攻した神風特攻隊員を水葬する米軍兵士達

の塗料は水色です。ガイドさんの説明で艦上戦闘機なので水色、皆さんのが眼にするのは陸上配備のため緑色ですといわれ納得。ドーリトル攻撃隊が起用したB-25、意外と小型です。また中国戦線で活躍した米国義勇航空隊・フライングタイガーも展示されておりました。

4ヶ所見て廻り改めて日米の国力の差を実感しました。また真珠湾で沈めた船も引き上げ修理、戦列に復帰、結局使用できなくなったのはアリゾナ、オクラホマ、ユタの3隻だけというのは辛い事実です。

報告

慶應義塾の運動部部室は日吉台小学校の仮教室になる

副会長 亀岡敦子

昨年11月に偶然知り合った女性から、戦中戦後の日吉について、私には初耳の興味深い話を聞きました。日吉台国民学校（当時）生徒は、1945年4月15日の空襲で校舎が全焼したため、戦後の数年間を、慶應義塾日吉校地マムシ谷の運動部の建物を教室として勉強していた、というのです。日吉台小学校は東横線日吉駅西側、慶應義塾普通部に隣接する150年近い歴史を持つ小学校です。この学校が戦争に翻弄されたことは知っていました。1944年8月から始まった学童集団疎開では、その疎開先がなんと学区内の下田町真福寺と高田町興禪寺という不自然さでしたし、直後の9月には海軍人事局功績調査部が入り、空き教室を使用しました。学童疎開対象外の1、2年生は一年近く海軍と同居していたわけです。どの様にすみ分けていたのか、分かっていません。

校舎焼失後は近隣の寺社が教室となり、46年からは、連合軍に接收されて、荒れほうだいだった運動部部室が全学年の教室となりました。お腹を空かしながらも子どもたちは元気に、慶應の山を駆け回って遊んでいたそうです。職員室は保福寺の本堂が当てられていたそうで、新校舎が完成するまでの数年間、小学生たちはアメリカ軍と日吉キャンパスで同居していました。稀有な体験と言えるでしょう。

この事実を知ったとき、戦争を通して日吉の歴史を見ていたつもりでしたが、そこにいた一人ひとりがどのような状態に置かれ、何をしていたのか、特に子どもたちへの視点が欠けていたことに気が付きました。大きな反省点です。これから、聞き取りを手始めに、何とか日吉の市民の歴史に近づいていきたいと思っています。



1950年頃の日吉台小学校校庭（奥にコンクリートの防空壕が見える）
『戦争遺跡を歩く　日吉』より



慶應の剣道場を仮教室としての授業　『日吉台小学校創立百周年記念誌』より

連載

日吉第一校舎ノート(12) アール・デコの意匠(その2)

会長 阿久沢 武史

中村は大正9年(1920)から3年間、パリのエコール・デ・ボザール(国立高等美術学校)で学び、そこで徹底した古典主義の教育を受けながら、新しく生まれつつあったアール・デコの息吹を全身で感じていた。それが後に豪華客船の内装デザインに結実していくことになる。帰国後の大正15年(1926)から昭和19年(1944)の18年間で彼が設計に関与した船舶は22隻に及び、ほぼすべてが戦争によって沈んだが、そのインテリアデザインの幾つかは僅かに残された写真や設計図面で確認することができる。特に大型客船・樺原丸の船内装飾は、日本の豪華客船の最高峰と言われ、中村は一等社交室のデザインを担当した。網戸武夫はこうした師の仕事に直に接し、強い感化を受けた。「中村が船舶の室内設計に構像した世界は、家具、調度、照明等一切を、作家の理念によって秩序づけた建築的空間」であり、樺原丸に見られる建築的秩序は「空間の音楽」であり「詩」であり、それを支える「幾何学的理性」と「冷やかなまでの計算による量的分割と按配の法則」によって、「日本人が到達し得なかつた世界性をもつた形象を完結した」と網戸は評する(『情念の幾何学』)。しかしながら、その樺原丸は建造半ばにして航空母艦「隼鷹」に改装され、太平洋を歴戦、佐世保で終戦を迎える、客船に戻ることなく昭和22年(1947)に解体された。アール・デコの作家として中村が到達した「世界性に輝く形象」は、戦争によって幻に終わるのである。

第一校舎が竣工した昭和9年(1934)は、まさに「アール・デコの時代」のただ中にあつた。第一校舎は古典主義の様式を基調としながら、当時世界的に流行していたアール・デコの意匠から決して自由ではない。むしろ、設計者・網戸武夫は進んでアール・デコを取り入れ、古典主義との融合をはかるうとしていた。

網戸は『建築・経験とモラル』で、次のように述べている。

当時のデザインの時代的な潮流は、ヨーロッパではフランスが中心で、すでにアール・デコの時代に入っていました。ですから、この建物でもアール・デコの影響を非常に受けたということは、否めません。(中略) ドイツのバアハウス系の横に窓がつながった水平の開口部、ああいうデザインは取り入れなかつた。日本では、横に窓をつなぐということはバアハウス時代、もう建築の信条というように流行っていました。そういう意味で、日吉の第一予科校舎は、流行とは何ら縁がなかつた。ただ私自身、アール・デコ的な近代性というようなものに対しては、非常な憧れをもっていました。

当時の鉄筋コンクリート建築は、ドイツのバウハウス派に代表されるモダニズムスタイルが主流であった。建物は単純な箱型の構造で、平面的で変化のない壁に長方形の窓が整然と並ぶ「白と直角のデザイン」である。網戸がインターナショナルなモダニズム建築の風を強く受けながら、第一校舎の設計にあたつてこだわったのは、ギリシア風の列柱を持つ古典主義の様式であった。

第一校舎の壁面は、一見すると整然と窓が並ぶ「白と直角のデザイン」のようであるが、ほ



落成式当日の第一校舎、慶應義塾福澤研究センター所蔵

ぼ全面にわたって屋上に近い最上部に「コーニス」(水平の帯)が伸び、それに直角に交差して「付け柱」が並んでいる。付け柱は校舎裏手(東側)にあたる中庭に面した壁面を含めて等間隔に刻まれており、柱廊の列柱とあわせれば、まるで校舎全体に何本もの柱が林立しているような印象を与える。コーニスも付け柱も、ともに古典主義的な装飾である。第一校舎の壁は同じキャンパス内にある谷口吉郎設計による寄宿舎(昭和12年竣工)のモダニズム建築と比べる時、その個性が際立つことになる。壁面の全体にわたって網戸のこだわりが感じられ、「平面的で変化のない壁」には見られない豊かな表情に満ちた外観がデザインされている。

若き網戸は、モダニズム建築の「流行性」と一線を画そうと強く意図しながら、アール・デコの「近代性」に惹きつけられる。第一校舎は、いわばクラシックとモダンがせめぎ合う1920年から30年代という時代を象徴する建築であり、そこにこの建物のもつ魅力とエネルギーがある。網戸における「モダン」とは、一つには「鉄筋コンクリート構造による表現の可能性を追及すること」であり、一つには「学びの空間のロマン」を作り出すことであった(『情念の幾何学』)。この二つは根底において互いに深く結びつく。そしてそこに込めた作り手の思いは、アール・デコの意匠の中に見ることができるのである。

※本稿は『慶應義塾高等学校紀要』第46号(2015年)に発表した拙稿「日吉第一校舎ノート(二) クラシックとモダン」の再録となります。

聞き取り

元電信兵・保坂初雄さんの日吉勤務体験談

文責:山田譲

2016年11月1日に、元電信兵の保坂初雄さんから体験談をうかがいました。保坂さんは日吉の連合艦隊司令部に1944年9月から1945年7月まで勤務し、その後、終戦まで奈良県の大和航空隊に行きました。山梨県南アルプス市の御自宅そばの「道の駅富士川」で会っていただき、娘さんの原まゆみさんにも御一緒いただきました。その時のお話の要旨を、前後関係を整理し直してまとめました。

《聞き取り:山田譲、山田淑子》

気象班を担当、朝鮮人労働者が地下壕掘り

高等小学校を卒業(昭和14年、14才)して、横須賀の海軍工廠(造船所)の見習工員教習所に入学し、2年で卒業して海軍工廠の工員として軍艦を建造していたが、昭和18年12月に18才で海軍に志願した。

まず防府通信学校に行って卒業したあと、はじめは蟹ヶ谷の通信隊に行き、そのあと連合艦隊司令部勤務で「大淀に乗れ」と言わされて横須賀の巡洋艦大淀に乗ったが、すぐ日吉に移った。トラックの荷台に30人か40人くらい乗せられて、日吉の丘の山際に降ろされた。6尺(1.8メートル)くらいの川があつて橋がかかっていた。はじめ



保坂初雄さんと娘さんの原まゆみさん

は大きな校舎（第一校舎←地図で確認）の1階の端の部屋に入って、この建物なら空襲があるても大丈夫だと思っていたが、しばらくしてカマボコ兵舎（地下壕南西側、足立さん宅の所←地図で確認）に移された。

後で空襲があるって、崖の下沿いに進んで丘の上に登って火事の消火をした。2階建ての木造の建物（体育会本部の建物と思われる）で、2階から飛び降りて足をケガして麻酔無しで足を切断した兵隊がいた。「殺してくれ」と叫んでいた。建物の中にドラム缶の燃料があったので、爆発して燃え終わるまで手を出せなかった。日吉の駅の方に向かうT字路（銀杏並木突き当り←地図で確認）の先の工業大学の所も丸焼けで、火が熱くて近寄れない。火が消えた後も地面が熱くて革靴が縮んでしまった。

日吉では自分は気象班で、班長の下士官と自分その他に部下が2人いた。「特攻待ち受け」もやった。特攻機からの電波を受ける係です。暗号電信文は海崎（かいさき）兵曹にわたす。特攻待ち受けになる前は、尻をバッター（「海軍精神注入棒」と書かれた木の丸棒）でたたかれた。

日吉に行ったはじめは、「1a」の出入口の所（マムシ谷の奥←地図で確認）の地下壕を掘っていて、そこに気象班は入った。受信機は3~4台あった（92式特改4受信機の写真をお見せすると「これだ」とのこと）が、受信周波数がわからず何もしないでいた。穴の中は丸太の木組みがしてあった。穴の先の方を朝鮮人が掘っていて、2人でモッコをかついで自分たちの後ろを通った。レールやトロッコはなかった。「朝鮮、朝鮮と馬鹿にするな」と叫んでいた。朝鮮人は15人くらいだった。コークスを燃やしてツルハシの先を叩いて尖らせていました。焼きの入れ方をわかっていた。そのうち10日か20日したら、「16a」の出入口（足立さん宅のところ）の方の通信室が出来上がっていた。すごく早かった。立派な造りだった。コンクリートの壁で蛍光灯が付いていてびっくりした。明るくて、字を書くのに楽だった。

気象の無線を聞いたのは2~3回位です。気象の放送があった。しかし、その仕事は自分はあまりしなかった。電信室では班ごとに尻バッターをやられたが、自分は気象班で少人数の班なのでやられずにすんだ。受信機の前にすわっているとお尻が痛くなってつらい。自分はそういう経験は少なかった。

電信兵が受けた暗号文を、海崎兵曹が暗号兵にわたす。暗号兵とは交流がなかった。その兵曹がバッターの係だった。海崎兵曹は5月か6月に兵曹長になった。日吉にきてからも自分は連合艦隊司令部とは知らなくて、日吉部隊と言われていて、それ以上わからなかった。

ハンコ彫りの仕事も、アンテナは電柱を3本つないだ木製

特攻待ち受けのほかに、日吉ではハンコを彫った。彫る道具もつくった。横浜も川崎もハンコ屋はみんな徴兵されて店がなくて、「誰か作らないか」と上官に言われて、自分は手先が器用だったので経験はないがやった。士官の兵隊のものも作った。作ると成田の方の饅頭をくれた。道具は疊屋の大小の針をもらってきて、焼いて玄能（金槌）で叩いて彫刻刀をつくった。自分は海軍工廠に勤めていたので、焼き入れのやり方を知っていた。材料は出入口を出したところの民家の桃色の花の咲く木（サザンカらしい）を切って使った。司令長官室の掃除もさせられた。自分が行ったのは6畳のせまい部屋だった。上官に言われて、烹炊所（海軍用語で炊事場のこと）から湯をもらってきて掃除した。次の日に、また行ったら別の下士官がいて「なぜ湯がいるのか」と言ってバッターでたたかれた。

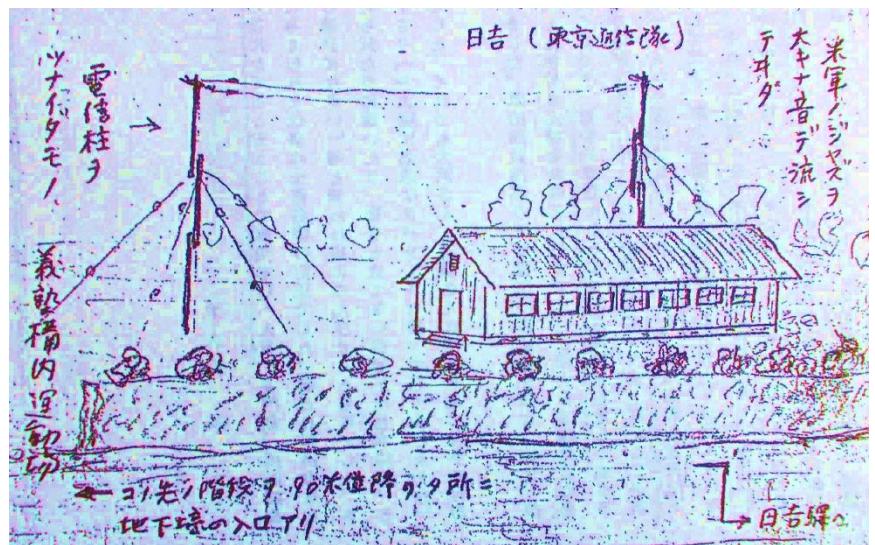
アンテナの柱は、（航空本部勤務だった伊沢正八氏が持っていた、石井和義氏筆のスケッチのコピーを見せると）絵の通りで電柱を3本つないだもので、それが3ヶ所に立ててあった。絵に描いてある木造の建物のことはわからない。

出入口の前に桑畠があって、桑の間にネギが植えてあった。それを上官が盗んで焼いて食べた。自分も食べた。その上官はそのあとどこかにいなくなってしまった。（測量図にある）食料倉庫は知らない。バッテリー室はおぼえている。開閉器（スイッチ）の間に針金を当てるとき電気の熱で赤くなる。それでタバコの火を付けた。非番の時そんなことをしていた。将校もそれ

を笑って見ていた。

奈良県の大和航空隊に7月に移り、そこで終戦になった。広島の原爆のあと、白い服（「事業服」という名の作業服）を草色に染めた。毎日、空襲があつて、いやになつた。通信機もなにもない所なので、穴掘り（防空壕造り）をしていた。8月15日の玉音放送を聞いたが、その後も上から解散命令が来なくて、自分は兵長で、まわりの人のなかで一番えらかったので、部下20~30人位に解散命令を出して帰郷した。米を持って帰った。これでたすかつたとおもつた。うれしかつた。

自分の「軍歴表」で「戦務丁」と書かれているのは甲乙丙丁の丁で、戦地にいると甲がつく。丁は危険度が低い。この等級によって給料がちがう。「大淀に乗れ」と言われた時、3000円もらった。終戦になってから給料をもらった。（このあたり、話が少しあつくりしない）



航空本部勤務だった伊沢正八氏が持っていた、
石井和義氏筆のスケッチ

戦後は園芸農家で、音楽グループ演奏も

防府の通信学校で2月10日位に軍樂隊が音楽を聞かせてくれた。雪が降るような寒い日に桜が咲いたような気がして感激した。音楽の素晴らしさを感じて、戦後、もらった3000円でバイオリンを買って楽しんで弾いた。グループをつくって「シルバースターズ」とか「ひばり」とか名前をついた。

横須賀海軍工廠工員教習所で修身、科学などの勉強することができ、高等小学校卒業でしかなかったので、その後のためになった。入学したときは600人中350番くらいだったが卒業の時は35番くらいだった。横須賀海軍工廠にいた時、戦艦大和が入港していて見に行つた。空母信濃の建造も見た。6号ドックでつくなっていた。海軍工廠では鉛打ち（船体の鉄板を接合する作業）のための穴あけ（穿孔）をやっていた。25cmの鉄板に穴あけをする。力仕事だった。空母雲龍をつくったし、巡洋艦能代もつくった。

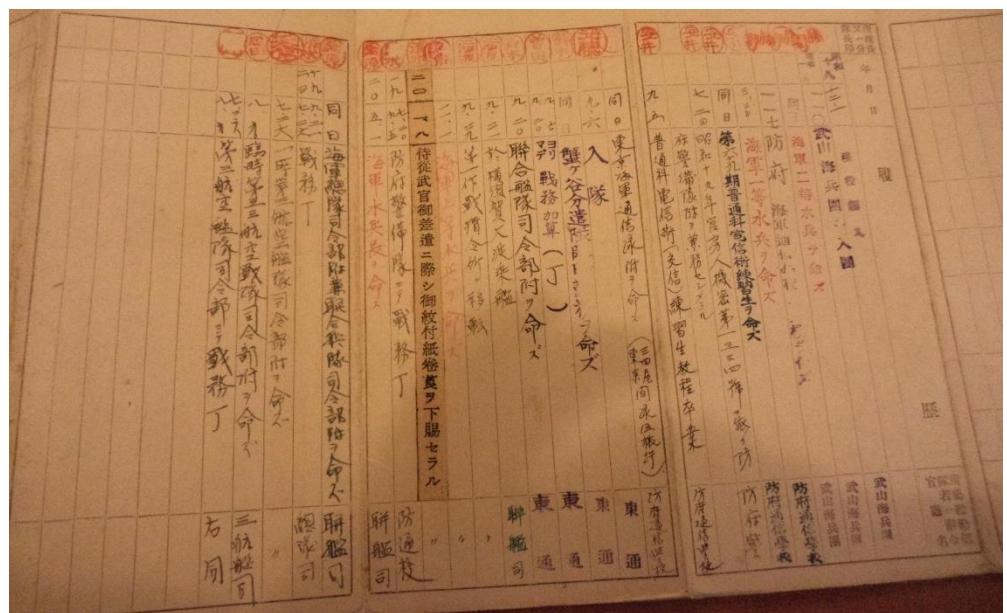
戦後は山梨県の実家に帰り、父から桑の接木を習つて1日に何百本も接木した。そのあと人が入れる大きさの大型のビニールハウスを工夫したり、木工所をつくつて障子や襖張りの表具師もやつた。今はビニールハウスでキュウリをつくつてある。朝5時半に起きて農作業をしてから朝ごはんの毎日です。現在91才です。

原まゆみさんの話——お父さんが大和航空隊にいたという話を聞いて、学習院大学の歴史の斎藤先生が聞き取りに来たことがありました。7月28日に林尹雄（ただお）という人が奈良の航空隊にいて、紀伊半島の先の方で偵察で撃たれて亡くなり、その兄が『わが命、月明に燃ゆ』という本を書いたそうです。そのことを調べていました。

保坂初雄さんの経歴と「軍歴表」の記載

1925 年	大正 14 年	7 月 1 日	5 人姉弟の末子として誕生
1939 年	昭和 14 年	3 月	高等小学校卒業 (14 才)
		4 月	横須賀海軍工廠見習工員教習所入学
1941 年	昭和 16 年	3 月	見習工員教習所卒業、4 月横須賀海軍工廠に勤務 巡洋艦能代、空母雲龍を建造
1943 年	昭和 18 年	12 月 1 日	現役編入 (海軍志願) (18 才)
1944 年	昭和 19 年	1 月 10 日	武山海兵团に入団 海軍二等水兵
		1 月 17 日	防府海軍通信学校入校
		3 月 20 日	第 69 期普通科電信術練習生 海軍一等水兵
		7 月 20 日	防府警備隊付兼務 (19 才)
		7 月 20 日より 9 月 5 日まで	防府警備隊にて戦務丁
		9 月 5 日	普通科電信術 (交信) 練習生教程卒業 東京海軍通信隊付
		9 月 6 日	蟹ヶ谷分遣隊□□勤務
		9 月 7 日より 9 月 20 日まで	戦務加算 (丁)
		9 月 20 日	連合艦隊司令部付
		9 月 21 日	於横須賀大淀乗艦
		9 月 29 日	第一作戦指令所に移転
		11 月 1 日	海軍上等水兵
1945 年	昭和 20 年	1 月 8 日	侍従武官御差遣に際し御紋付紙巻菓 (タバコ) を下賜
		5 月 1 日	海軍総隊司令部付兼連合艦隊司令部付 海軍水兵長
		昭和 19 年 9 月 21 日より 20 年 7 月 26 日まで	戦務丁
		7 月 26 日	一時第三航空艦隊司令部付 (20 才)
		8 月 9 日	臨時第五三航空戦隊司令部付
		7 月 26 日より 8 月 9 日まで	第三航空艦隊司令部にて戦務丁
		8 月 15 日直後帰郷。以後山梨で農業、表具師。91 才の現在も農作業	
(昭和 18 年 12 月 1 日～昭和 20 年 8 月 9 日は、「軍歴表」の「履歴」の記載)			

【この後、保坂初雄さんよりお話があり、2015年2月28日にご家族とともに日吉台地下壕の見学会にいらっしゃったことをお話しされていました。70年ぶりに想い出深い地下通信室を再訪することができ、感無量だったとのことでした。】

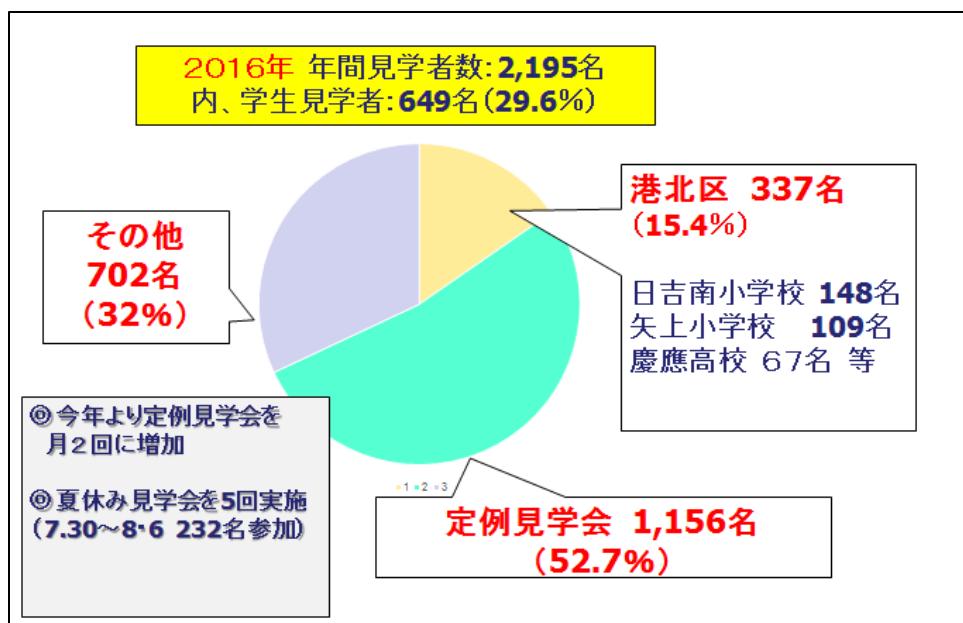


保坂初雄さんの軍歴表

報告**2016年度地域のチカラ応援事業「平成28年度最終報告会」**

運営委員 小山信雄

3月4日（土）、慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎1階シンポジウムスペースにて、“地域のチカラ応援事業最終報告会”が開催されました。チャレンジコース23団体の内、12団体が発表を行うことになり、日吉台地下壕保存の会は前年度に引き続き、3年目となる発表を行いました。6名の事業推進懇話会委員と約60名の参加者・観客の皆様に向かって、持ち時間8分間（厳しく時間厳守）の最終報告を行い、質疑応答となりました。見学者数は前年より減少したものの、2,195名となり、内約40%は学生の見学者となりました。ガイド養成講座の新たな受講者は11名となり、全員が講座修了し、既に一部の方々には実際にガイド活動を始めていることを報告。また、2016年1月からは従来月一回（第四土曜日）であった定例見学会を、第二水曜日を加え月2回体制にし、以前より計画が立て易くなったものの、引き続き平日対応ガイド養成が最重要課題であることを報告。今年度で3回目となる港北図書館でのパネル展示会＆講演会については、アルミフレームのパネルに変更して、大変見やすくなつたと好評であったこと、講演会では初の試みとして、「中高生向け特別授業」を開催し、父兄の方も含め18名の参加となり日吉台地下壕について関心を高めて頂けたことなども報告。今後の課題として、戦争体験者の方々からの直接の聞き取りが益々困難になりつつある状況を踏まえ、非体験者から「戦争」をどのように伝えてゆけるのかというテーマに取り組んでおり、具体的には丁度同日開催されたガイド養成講



座でも講座として取り上げてることを報告。引き続き、ガイドの人員確保と質の向上を図って日吉台地下壕を多くの人に知って貰うよう努力してゆきます。



平成28年度地域のチカラ応援事業「最終報告会」

お知らせ

雑誌『横濱』の、日吉空襲の記事について

運営委員 山田譲

横浜エリアで人気の雑誌『横濱』(横浜市との協力編集誌・神奈川新聞社発行)の2017年春号に「なぜ日吉が爆撃されたのか?」という記事が出ました。これについては事前に、筆者の横浜市都市デザイン室の綱河功さんから、保存の会に原稿内容の確認依頼がありました。いくつか誤りと不十分なところがあったので修正案文をお送りし、綱河さんより修正版をいただきました。ところが編集部のミスで、修正前の文案のまま印刷されてしまったことで、次号にお詫びと訂正記事を入れることです。記事中、不適切な所は次の点です。

- ①、「海軍は日吉にある慶應義塾の接收を開始」 ⇒ 「接收」ではなく賃貸借契約
- ②、「郊外部で3度も爆撃されたのは日吉だけ」 ⇒ 綱島、大倉山は5回空襲されている
- ③、「真相は定かではありません」 ⇒ 諸説あることを明記すべき
- ④、「地下壕を攻撃する」 ⇒ 焼夷弾攻撃なので攻撃対象は地上施設・家屋

日吉の空襲については、連合艦隊司令部などの海軍施設の存在を米軍が知っていて日吉を空襲したのかどうかということが、以前から戦争遺跡保存運動の中で論争問題でした。日吉は軍需工場が多い武蔵小杉に隣接する地域であり、また、米軍の空襲作戦が住宅・民家を焼きつくすことを目的とした無差別焼夷攻撃だったことも見逃せません。なお、私たちのつくった日吉周辺の空襲被害地図は、日吉周辺に限った被害調査なので、日吉の北側(矢上川以北)は対象外です。しかし実際には、ここも空襲被害を受けています。

活動の記録 2017年2月～4月

- 2/7(火) 運営委員会(来往舎205号室)
- 2/8(水) 定例見学会 65名
- 2/16(木) 平和のための戦争展 in 横浜実行委員会(かながわ県民センター)
- 2/22(水) 地下壕見学会 聖心女子高校3年生・先生 23名
- 2/25(土) 定例見学会 60名
- 2/28(火) 地下壕見学会 田園調布学園高校3年生他 30名
- 3/4(土) 第2回 ガイド養成講座
- 3/6(月) 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会(かながわ県民センター)
- 3/7(火) 運営委員会(来往舎205号室)
- 3/8(水) 定例見学会 40名
- 3/11(土) ガイド学習会(菊名フラット)
- 3/21(火) 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会(かながわ県民センター)
- 3/25(土) 定例見学会 60名
- 3/27(月) 地下壕見学会 日本心理学会知覚コロキウム 39名
- 3/31(金) 地下壕見学会 横浜市立大綱中学校2年生・先生 16名
- 4/1(土) 戦争遺跡保存全国運営委員(高知県・草の家)
- 4/3(月) 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会(かながわ県民センター)
- 4/8(土) 公開講座「戦争の『何を引き継ぐ』のかー慶應義塾における実名と実物の継承の試みー」 都倉武之さん(来往舎シンポジウムスペース) 参加者 50名
- 4/12(水) 定例見学会 35名
- 4/14(金) 地下壕見学会 神奈川県私立小学校社会科協会 30名
- 4/15(土) 第3回 ガイド養成講座 フィールドワーク(午前・日吉キャンパス側
午後・日吉の丘公園側の地下壕周辺)
- 4/20(木) 運営委員会(来往舎205号室)



3月27日 日本心理学会知覚コロキウムの見学会
第8校舎(812教室)にて



★日吉台地下壕見学会は毎月2回実施しています。
(毎月第2水曜日10時~12時30分
第4土曜日13時~15時30分) 予約申し込みが必要です。
お問い合わせは見学会窓口まで。
(Tel・Fax 045-562-0443 喜田 午前・夜間)

★定例見学会予定

5／10(水) (定員を超えました)・5／27(土)・6／14(水)
6／24(土)・7／12(水)・7／22(土) 7月下旬～8月
上旬に夏休み見学会を数回実施します。(8月11日～31日
まで見学会はありません)

「人事局地下壕」がこの教室の真下
に存在。この四角く飛び出している
所は、真下の地下壕に接する校舎建
設の杭。

連絡先 (会計) 亀岡敦子 : ☎ 223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15 TEL 045-561-2758
(見学会・その他) 喜田美登里 : 横浜市港北区下田町 2-1-33 TEL 045-562-0443
ホームページ・アドレス : <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報	(年会費) 一口千円以上
発行 日吉台地下壕保存の会	郵便振込口座番号 00250-2-74921
代表 阿久沢 武史	(加入者名) 日吉台地下壕保存の会
日吉台地下壕保存の会運営委員会	